

2025年の回顧と新年の展望

～ 2025年の回顧 ～

国内景気

～緩やかな回復基調をたどる

2025年の国内景気を振り返りますと、米国の通商政策や外需減速の影響を受けて生産が横ばい圏で推移した一方、設備投資が底堅い投資意欲に支えられ堅調さを示したほか、個人消費も雇用・所得環境の改善に伴い持ち直すなど、総体では緩やかな回復基調をたどりました。

項目別にみると、個人消費は長引く物価高の影響がみられたことから、生活防衛意識の高まりによって一部に弱い動きがみられました。しかし、賃上げに伴う実質所得の改善や、堅調なサービス消費が支えとなり、全体としては緩やかな持ち直しの動きが続きました。

設備投資は、外需依存度の高い産業では投資抑制の動きがみられましたが、生成 AI やデジタル分野、自動化・省力化、脱炭素関連分野の投資が堅調に推移し、総体では緩やかな増加基調で推移しました。

生産は、米国の関税引き上げや中国経済の減速などに伴い輸出産業で減産傾向がみられたものの、国内需要の底堅さが下支えとなり、全体としては横ばい圏で推移しました。

県内景気

～持ち直しに足踏み

県内景気を振り返りますと、外国人観光客を中心に各地で賑わいがみられるなか、観光関連産業が堅調に推移しました。しかし、生産面において、機械工業で弱い動きが続き、需要面でも、設備投資で慎重姿勢が窺われたほか、個人消費も力強さを欠くなど、総体では持ち直しに足踏みがみられました。

項目別にみると、個人消費は、物価高に伴う生活防衛意識の高まりから消費マインドが低下し、食料品や日用品などの非耐久財、家電品や乗用車といった耐久財ともに年間を通して弱い動きとなりました。一方で、旅行や各種イベントなどの消費では堅調さをみせるなど、メリハリのある消費行動もみられました。

設備投資は、効率化・省力化などを図る一部の工場や商業施設、宿泊施設で投資が進みました。しかし、総体では、海外経済の不透明感や建設コストの高止まりに伴い、慎重姿勢が続きました。なお、公共投資では土木工事を中心に底堅さがみられた一方、住宅投資は弱含みで推移しました。

生産は、機械工業において半導体製造装置や自動車向け部品が力強さを欠いた一方、生成 AI 関連の電子部品・デバイス、産業用ロボットなどで改善がみられ、全体としては横ばい圏で推移しました。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業は、国

内市場の縮小や製造コストの上昇などの影響で、総じて厳しい局面が続きました。

なお、観光関連をみると、夏場に日本で大災害が起きるとした風評が拡大し、アジア圏の外国人観光客が落ち込む場面もありましたが、年間を通して、富士北麓地域を中心とした外国人観光客の増加が顕著であったほか、国内客も底堅く推移しました。

～ 新年の展望 ～

国内景気

～緩やかな回復基調を維持

2026年の国内景気は、外需の不透明感が続くと予想され、生産は横ばい推移が見込まれます。しかし、生成AIやデジタル分野などの設備投資が堅調に推移するとみられ、個人消費も賃上げの定着と物価上昇幅の鈍化による好循環が期待されます。さらに、政府の経済対策も景気を下支えし、全体では緩やかな回復基調を維持するとみられます。また、2月にミラノ・コルティナで国際的なスポーツイベントが開催されるのを契機に、野球やサッカーなどの世界大会も行われ、社会・文化、経済への広域的な影響も期待されます。ただし、過度なインフレ圧力の高まりに伴う個人消費の縮小、企業収益の減少に伴う設備投資の抑制や賃金の低下、人手不足による供給制約などが景気の下押し要因となる可能性があるため、これらを注視する必要があります。

項目別にみると、個人消費は、全体として底堅く推移するものと考えられます。所得環境の改善や政府の経済対策が消費を後押しするとみられるほか、生活必需品の価格上昇が落ち着くことでこれまでの節約志向が和らぎ、耐久財やサービス消費の拡大も期待されます。なお、このところ上昇傾向が続いている物価については、電気代・ガス代の補助などの政府の物価対策やガソリン税の暫定税率の廃止、食料品など前年の物価上昇の影響が一巡することから、上昇幅が鈍化し、やや落ち着いた展開になると予想されます。

設備投資については、生産性向上のためのデジタル技術導入設備や人手不足対策としての自動化・省力化投資、脱炭素関連に向けた取り組みが牽引役となり、緩やかな増加が見込まれます。

生産は、自動車や電子部品など輸出依存度の高い機械工業を中心に伸び悩む展開が予想されます。ただし、高水準が続く半導体需要や国内需要の増加が期待されるヘルスケア・医療関連や再生エネルギー・脱炭素関連が将来的な経済成長の端緒となると期待されます。

県内景気

～緩やかな回復に向かう

県内景気は、生産面では、半導体製造装置など機械工業が増産に向かうと期待されることや、設備投資が持ち直しに向かうなか、雇用・所得環境の改善や政府の経済対策などを通じて個人消費も増加基調で推移していくと見込まれることから、全体としては緩やかな回復に向かうとみられます。

項目別にみると、個人消費は、人材の維持・確保や従業員のモチベーション向上を図るため、賃上げに取り組む企業の拡大が見込まれ、消費マインドの改善を通して、緩やかに上向くと考えられます。

設備投資は、増加基調に転じていくものと考えられます。外需の不透明感が重石となるものの、人手不足やデジタル化への対応といった中長期的な課題解決に向け、設備投資に取り組む企業が増加するとみられます。

生産面は、機械工業について、生成 AI 関連の電子部品・デバイス、産業用ロボットなどが引き続き堅調に推移するとみられるほか、半導体製造装置は、高い半導体需要を背景に春先以降は増勢に向かい、自動車向け部品も、米国の関税政策の不確実性が和らぐなかで上向いていくと期待されます。また、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業については、物価高や国内需要の伸び悩みから、厳しい局面が当面続くと考えられますが、新製品開発に注力することや、顧客ニーズを捉えた自社ブランドの構築などに取り組むことで、新たな需要の取り込みが可能となると考えられます。

なお、観光関連をみると、中国人観光客の動向など不安要素はありますが、全体では、国内外の観光客の更なる増加が見込まれ、県内各地で賑わいが続くと期待されます。

～ 午（ウマ）の話 ～

2026年は、午年です。午（馬）は、生物学上では哺乳綱奇蹄目（ウマ目）ウマ科ウマ属に分類される草食動物です。奇蹄目は、蹄（ひづめ）として知られる強靭な爪の層に囲まれた第三指に力をかけて立つ四足動物を指し、サイやバクも奇蹄目の仲間です。午（馬）は世界中に分布しており、多様な品種がありますが、体格に基づき分類すると、体が大きく力が強い「重種」、乗馬や馬術競技に優れた「中間種」、競馬で活躍する「軽種」、体高 147cm 以下の小柄な馬である「ポニー」の概ね 4 種類に分けられます。草食動物である馬は肉食動物から逃げるため、足元が軽くかつ長い足で速く走ることができるよう進化してきました。また、いつ襲われるか分からないという環境の中で暮らしていたことから、非常に感受性が強く、環境の変化や接する人の態度・言葉の調子にも敏感に反応します。

馬を家畜として飼育できるようになったのは、牛や羊、豚などと比べ新しい年代と言われています。当初は食用や乳用が主体でしたが、ラクダなどと比べてスピードが速いことから、乗馬としての活用が全世界に広がりました。乗馬により羊や牛の大群を管理することができるようになると、騎馬遊牧という生活スタイルが確立され、長距離移動が可能となりました。その後、軍事的な活用も進み、モンゴル帝国などの広大な勢力圏をもつ国の統治にも影響を与えました。

日本では古くから、馬は神様の乗り物とされ、神聖視されていました。山梨にも「天かける黒駒」という言い伝えがあります。昔、甲斐の駒城（今の北杜市の一一部）で金の蹄をもった仔馬が生まれました。体は真っ黒でしたが、足だけは真っ白で四白の馬として珍しがられ、大事に育てられました。成長した馬は奈良の聖徳太子に献上されると、聖徳太子を乗せ、天を駆け出し、靈峰富士の頂を超えて、3 日で都に戻ってきました。旅の途中に故郷の駒城へ行き、太子が山の湧き水を飲むと、山に不思議な力が宿り、この山の湧き水を飲んで育った馬は必ず名馬（甲斐の黒駒）となると言われるようになります。

した。そして、駒城は名馬の産地として有名になり、この山を駒ヶ岳、また周辺を巨摩と呼ぶようになったそうです。

また、山梨の郷土料理には馬刺しがあります。先ほどの甲斐の黒駒の話から、山梨は貢馬（くめ）の国として知られていたほか、富士山の信仰登山で荷揚げ用の馬が多く飼育されていたことなど、馬が身近にいたことから、安く手に入る馬肉の料理が盛んになったと言われています。

わが国の午年の歴史を振り返りますと、安政の大獄（1858）、上野動物園開園（1882）、日米通商航海条約（1894）、スペイン風邪流行（1918）、ミッドウェー海戦（1942）、自衛隊発足（1954）、日本の総人口が1億人を突破（1966）、新東京国際空港（現成田空港）開港（1978）、大蔵省が不動産融資の総量規制を通達（1990）、ペイオフ制度導入（2002）、消費税率を5%から8%に引き上げ（2014）などの出来事がみられました。

また、山梨県関連では、天目山の戦い（1582）、電話開通祝賀会（1906）、県庁新庁舎完成（1930）、足和田災害（1966）、中央高速バス甲府—新宿間開業（1978）、リニア実験線建設着手（1990）、中部横断自動車道双葉JCT～白根IC間開通（2002）、記録的豪雪で被害甚大（2014）などの出来事がみられました。

なお、午年生まれの著名人としては、浅田真央、ado、ISSA、江戸川乱歩、エマ・ワツソン、小泉純一郎、ショーン・コネリー、玉森裕太、豊田喜一郎、中曾根康弘、中尾彬、長谷川京子、林真理子、広瀬香美、フランクリン・ルーズベルト、本田宗一郎、松下幸之助、miwa、山本陽子などがいます。

陰陽五行によると、2026年は、「丙午（ひのえ・うま）」にあたります。「丙」には、明るい機運（陽気）が高まるが、同時に衰退が始まる、という意味があります。また、「午」には、陽気が下から上に突き上げて出ようとしている姿を表し、逆らうという意味があります。このため、「丙午」は、「昔からの慣習やしきたりを打ち破るような、革新が起こる」年ということになるでしょうか。

2025年は、20年ぶりに日本で万博が開催され、多くの観光客で賑わったほか、日経平均株価が史上初の5万円に到達するなど、明るい話題が多かったように思います。2026年も日本勢の活躍が期待できる国際的なスポーツのイベントが続き、更なる飛躍が望まれる年になりそうです。新しい年は、「竜馬（りゅうめ）の躡（つまづ）き」を恐れず、「天馬空を行く」ように、既成概念にとらわれることなく、新たなことにチャレンジしていく年にしたいものです。

※午（ウマ）の話は、十二支の民俗誌（八坂書房）などから当社で作成

※竜馬の躡き：どんなに優れた人でも時には失敗することがあるという意味

※天馬空を行く：天馬が空をかけるように、自由な発想や行動をするという意味

2025年12月
山梨中銀経営コンサルティング株式会社